国立国語研究所学術情報リポジトリ

鹿児島県肝付町（内之浦）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003553

鹿児島県肝付町（内之浦）*

髙城隆一

国立国語研究所 研究系 理論・対照研究領域／東京大学大学院／日本学術振興会 特別研究員

1. 対象とする方言の概要

本稿は，鹿児島県肝属郡肝付町内の旧内之浦町中心部（図 1）で話されている伝統方言（内之浦方言）の文法概説である。

図 1 九州南部の地図

旧内之浦町は鹿児島市からフェリーと車で南東に約 2 時間 30 分, 80km ほど離れた大隅半島東岸に位置しており，北から順に北方，南方，岸良の 3 地域に分かれる。鉄道や高速道路はなく，バスの本数も限られており，現地への移動は車が最も効率的である。平成 17 年に旧高山町と合併し肝付町となったことで，自治体としての内之浦町は消滅した。肝付町の住民基本台帳人口によると，旧内之浦町地域の総人口は，過去約 10 年（平成 23 年 8 月～令和 3 年 10 月）で 7 割程度に減少している。さらに，令和 3 年 10 月末現在の総人口 2,803 人の内 55.3%が 65 歳以上であり，平均年齢は 62.33 歳である。国内の多くの伝統方言と同様に年齢が下がるほど継承者が少なく，若年層にはほとんど引き継がれていない。

本稿は平成 30 年 8 月から令和 4 年 2 月までの期間[1]に複数回にわたり筆者が実施してきた，対面での調査票調査で得られたデータに基づいている。調査票調査にご協力いただいた北方地域と南方地域の話者 12 名の詳細を示す[2]。括弧内の数字は生年（すべて昭和），m と f はそれぞれ男性と女性を表す（例えば「19f」は昭和 19 年生まれの女性）。

(1) 話者情報

a. 北方 5 名：IK 氏（19f），KM 氏（23m），KI 氏（29f），NT 氏（27f），NM 氏（20f）

b. 南方 7 名：HK 氏（16m），KN 氏（24f），KS 氏（51m），TS 氏（10m），TT 氏（11m），YE 氏（20f），YF 氏（22f）

* 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」および，JSPS 科研費 17H02332，20J22969 の助成を受けたものである。長時間の調査にご協力いただいた内之浦の皆様，方言話者の方々をご紹介くださった肝付町教育委員会・肝付町シルバー人材センター・肝付町地域包括支援センター・肝付町社会福祉協議会の方々に御礼申し上げる。本稿執筆に際しては占部（2018），下地（2018），中村（2019），松岡（2021），森ほか編（2015）の章立てや例文の一部を参考にした。本稿の内容について匿名の査読者 2 名と青井隼人氏、松岡葵氏から貴重なご意見をいただいた。

[1] 新型コロナウイルス感染症の影響による約 1 年半の中断期間（令和 2 年 3 月から令和 3 年 9 月まで）が含まれる。

[2] このほか，本稿では考察の対象とはしないが，自然談話収録や語彙調査にご協力いただいた方や岸良地域出身の方も多数いる。

本稿の第 2 節では音韻論を記述する。第 3 節から第 7 節では形態論を記述する。第 8 節では統語論を記述する。

2. 音韻論

本節では音韻論を記述する。音素目録（2.1），音節構造（2.2），アクセント（2.3），モーラと音節（2.4），形態音韻論（2.5）の順で扱う。

2.1 音素目録

内之浦方言の音素目録を示す。母音音素は /i, u, e, o, a/ の 5 つであり，子音音素は /p, b, t, d, k, g, s, z, h, m, n, r, j, w, ʔ, ç, ɴ/ の 17 である。

表 1　母音音素

	前舌	奥舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 2　子音音素（音節頭）

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声	p	t		k	
	有声	b	d		g	
摩擦音	無声		s			h
	有声		z			
鼻音		m	n			
はじき音			r [ɾ]			
接近音				j	w	

表 2 に示した子音のうち /h, w/ 以外は音節末に現れうるが，音節頭で見られる対立の一部が中和する（2.1.2.2 も参照）。上記以外に音節末のみに現れる子音音素に /ʔ, ç, ɴ/ がある[3]。母音については 2.1.1 で，子音については 2.1.2 で詳述する。

2.1.1 母音

母音のうち /e/ は語頭で je ~ e の揺れが見られる（ ~ は音韻環境の違いに基づかない音声的な揺れを表す）。

[3] これらの子音は基底にも存在する（2.1.2.2 も参照）。

母音のうち /i/ は（1a, b）のように直前の子音を口蓋化させる。ただし（2c）のように /i/ と直前の子音が同一音節内にない場合には口蓋化は生じない。なお，以下で音節境界を明示する際にはピリオド (.) を用いる。// は基底の音韻表記であることを示す。表層形は簡略音声表記で示す。なお，口蓋化の記号（ʲ）は，2.1.2 以降では明示しない。

（2）	a. /ki/	kʲi	「木」	（口蓋化あり）
	b. /tiʔto/	tɕit.to	「少し」	（口蓋化あり）
	c. /kak+iru-ʳu/	kaʔ.i.ruj	「書き入れる」	（口蓋化なし）

母音の長短は弁別的である。長母音は同一の母音音素の連続であると解釈される。ただし，長母音の出現頻度は低い。二重母音については 2.1.2.2.4 の音節末接近音を参照。

2.1.2 子音

子音を音節頭（2.1.2.1）と音節末（2.1.2.2）に分けて記述する。任意の音節内において，母音より前の部分を音節頭と呼び，母音より後ろの部分を音節末と呼ぶ（2.2 の音節構造も参照）。

2.1.2.1 音節頭子音

音節頭には前から順に接近音以外の子音が入るスロットと，接近音のみが入るスロットの 2 つがある（2.5.3.1 も参照）。区別が必要な場合には前者を「頭子音のスロット」と呼び，ここに入る子音を頭子音と呼ぶ。後者は「わたり音のスロット」と呼び，ここに入る子音をわたり音と呼ぶ。頭子音とわたり音を合わせて音節頭子音と呼ぶ（2.2 の音節構造も参照）。

2.1.1 で述べた通り，同一音節内にある /i/ は音節頭子音の口蓋化を引き起こす。ここではこれ以外の条件異音を列挙する。歯茎閉鎖音 /t, d/ は，後続母音が /u/ のときに ts, dz ~ z として実現し[4]，後続母音が /e, o, a/ のときに t, d として実現する。声門摩擦音 /h/ は，後続母音が /u/ のときに ɸ として実現し，後続母音が /e, o, a/ のときに h として実現する。

接近音 /j, w/ は音節構造上，他の音節頭子音とは異なるスロット（わたり音のスロット）に入る。硬口蓋接近音 /j/ には /i, e/ が後続せず，両唇軟口蓋接近音 /w/ には /i, u, o/ が後続しない。

2.1.2.2 音節末子音

語末で対立する子音のミニマルペアを（3）に示す。語例は 1 段目に表層形，2 段目に基底形，3 段目に意味をそれぞれ示す（以下でも同様）。（3a）の /akj/ や（2b）の /asj/ のような基底形を設定する理由については 2.5.3.1 を参照。

（3） a. aʔ　b. aç　c. aɴ　d. aj

[4] /d/ は後続母音が /i/ のときと接近音 /j/ が後続するときにも dʑ ~ ʑ の揺れを見せ，これらの環境では /z/ と中和する。

/akj/	/asj/	/aɴ/	/aj/
秋	足	あの	あれ

2.1.2.2.1 音節末閉鎖音

音節頭に存在する阻害音 p, b, t, d, k, g, s, z の対立は音節末で中和する。基底における /p, b, t, d, k, g, ʔ/ が表層で音節末に立つ場合には，直後の音の有無と種類によって音声実現が予測できる。阻害音の直前では，調音位置・調音様式ともに直後の阻害音に同化して pp, bb, tt, dd, kk, gg, ss, zz, … のように実現する。鼻音の直前では，調音位置のみ直後の鼻音に同化して，無声の内破音として pm, tn, … のように実現する。なお，本稿では内破の記号（ˀ）は明示しない。頭子音が後続しない環境（接近音と母音の直前および語末）では声門閉鎖音 ʔ として実現する[5]。音声実現が上記のように音韻環境によって予測でき，この環境で対立は見られない。本稿では音声実現に関わらず，基底における /p, b, t, d, k, g, ʔ/ が表層で音節末に立つ場合，これを音節末閉鎖音（ʔ）と呼ぶ。（5a）では， kj のような音節末での子音連続や， j のみで構成される音節が音素配列上，許されないために j が規則によって削除される。これにより k が音節末に立ち， ʔ として実現する。

（4） 語中の音節末閉鎖音

a. babbaɴ	b. dossaj	c. katna
/baʔbaɴ/	/doʔsaj/	/kaʔna/
おばさん	どっさり	刀

（5） 語末の音節末閉鎖音

a. aʔ	b. miʔ	c. baʔ
/akj/	/midj/	/baʔ/
秋	水	ADVRS（逆接の接続助詞；7.3 も参照）

2.1.2.2.2 音節末摩擦音

音節頭に存在する摩擦音 s, z の対立は音節末で中和する。基底における /s, z, ç/ が表層で音節末に立つ場合には，[ɕ~ç] として実現する。本稿ではこれを音節末摩擦音（ç）と呼ぶ。（7a）では， sj のような音節末での子音連続や， j のみで構成される音節が音素配列上許されないために j が規則によって削除される。これにより s が音節末に立ち， ç として実現する。

（6） 語中の音節末閉鎖音

muçme

/muçme/

[5] 接近音や母音の直前に出現する例は，（1c）のような複合語幹境界においてのみ観察されている。

娘

（7）　語末の音節末閉鎖音

a. aç	b. kaç
/asj/	/kazj/
足	火事

2.1.2.2.3 音節末鼻音

音節頭に存在する鼻音 m, n の対立は音節末で中和する。基底における /m, n, N/ が表層で音節末に立つ場合には，直後の音素の有無と種類によって音声実現が予測できる。鼻音の直前では，調音位置・調音様式ともに直後の阻害音に同化して mm, nn, … のように実現する。閉鎖音の直前では，調音位置のみ直後の鼻音に同化して mp, nt, ŋk, … のように実現する。語末を含むその他の環境では実現幅があり，おおよそ軟口蓋と口蓋垂の間で調音される（本稿では口蓋垂音で代表させる）。音声実現が上記のように音韻環境によって予測でき，この環境で対立は見られない。本稿では音声実現に関わらず，基底における /m, n, N/ が表層で音節末に立つ場合，これを音節末鼻音（N）と呼ぶ。

（8）　語中の音節末鼻音

a. jamme	b. ɲiɲɲiʔ [6]	c. nanda
/jaNme/	/niNnit/	/naNda/
病気	ニンニク	涙

（9）　語末の音節末鼻音

a. aN	b. uN	c. ojdoN
/aN/	/un/	/oj-dom/
あの	海	私-PL（複数接尾辞；4.1.2 も参照）

2.1.2.2.4 音節末接近音

基底で母音に後続する際に存在する前舌狭母音 /i/ と硬口蓋接近音 /j/ の対立は表層の音節末で中和し，すべて j として実現する[7]（2.5.3.1 も参照）。本稿ではこれを音節末接近音（j）と呼ぶ。語末に j を持つと分析される名詞の例を（10）に挙げる。

（10）

aj	haj	saj	ɸuj	aj
/ai/	/hai/	/sai/	/huj/	/aj/
蟻	春	猿	冬	あれ

[6] 以下で [ɲi] は [ni] と表記する。
[7] 「サイン」のような借用語は 2 音節で sa.iN /sain/ のように実現する（ピリオドは音節境界）。この語が 2 音節であるとする分析は内之浦方言でピッチの上昇や下降が基本的に音節境界でのみ生じるという観察に基づいている（2.2，2.3 も参照）。

本稿が母音＋音節末接近音としている音連続を二重母音と分析し，音節末接近音を母音の i とする分析案は採用しない。アクセント体系（2.3 を参照）を観察すると，ae, ao, oe, ue, uo, ie, io のような母音連続の間にはピッチの上昇や下降が観察できる。この観察はこの箇所に音節境界があることを示唆しており，これらの母音連続はすべて，異なる音節にまたがっていると分析できる。これに対し，（10）の名詞は同じ基準を用いるとすべて 1 音節であると分析できる。そのため，異なる母音の連続と仮定しうる V_1V_2 において同一音節内にあると考えられるのは，本稿が母音と音節末接近音の組み合わせと分析する音連続が二重母音である場合，すなわち $V_2 = i$ である場合以外には存在しない。これに対し，ここまで述べてきたように，音節末子音は j を除いても語中・語末にかかわらず閉鎖音，摩擦音，鼻音が既に存在する。現時点では当該の音が接近音であることを積極的に支持する根拠も，母音であることを積極的に支持する根拠も見つかっていない。そのため，本稿ではここで示した記述の経済性の観点に基づいて，（10）のような語が音節末に接近音を持つと分析する。

2.2　音節構造

子音を C，わたり音を G，母音を V とおくと，内之浦方言の音節構造は（C_1）（G）V_1（V_2）（C_2）と表せる。ただし，語頭音節において V_2 と C_2 は共起しない。非語頭音節では直前の音節が V_1 で終わる場合に限り，V_2 と C_2 からなる音節が生起することがある（ただし，$V_1 = V_2$）。接辞境界をまたぐ任意の音連続 VC-V は VC.V ではなく V.CV として実現する。音節境界は基底と表層の間で挿入されると考える。

C_1 には j, w, ʔ, ç, ɴ 以外の子音が入り，固有語の語中かつ直前の音節が尾子音を持つ場合には必須である。G には j, w が入る。共起できる母音は G が j の場合 u, o, a に，w の場合 e, a に限られる。共起できる C_1 の子音は G が j の場合には制限がなく，w の場合 k に限られる。C_2 には語末で ʔ, ç, ɴ, j の 4 つが入る。ただし，語中においては同一子音連続の tt, kk などの 1 つ目の子音や，調音位置を同じくする鼻音と閉鎖音の連続 nt, mp などの 1 つ目の子音も現れる。

V_1 と V_2 にはすべての母音が入る。V_2 は V_1 と同じものに限られる。語頭には，V_1 に入る成節子音 n のみの音節も出現できる。この音節には頭子音として鼻音を持つ音節が必ず後続する。

2.3　アクセント

音節数の多寡にかかわらず 2 つのアクセント型が実現する。少数の例外を除くと，1 つは拡張語（＝語＋0 個以上の接語；下地 2018）の次末音節のみが高い下降型であり，もう 1 つは拡張語の最終音節のみが高い非下降型である。「雨」，「雨が」など拡張語を単独で発話したときのアクセント実現に揺れが見られる話者が多く，この場合には 2 つのアクセント型が任意に現れる。ただし，揺れの程度には話者ごとの違いがあり，揺れがほとんど見られずに 2 つの型を区別しているような話者も存在する。その場合のアクセント実現は鹿児島市方言（木部 2000）と酷似している。拡張語を単独で発話したときのアクセント実現に揺れが見られる話者の中にも，句や文に入れた

際に揺れが見られにくくなる話者や，拡張語単独のときと変わらず揺れが見られる話者が存在する。

（11）に 2 音節拡張語の例，（12）に 3 音節拡張語の例を示す。いずれも拡張語を単独で発音した際に揺れがある話者の例である。音節境界でのピッチの上昇を [で，下降を] で，音節内部での下降を]] で表す。語例 1 段目の ~ は発音に揺れがあることを示す。3 段目の = は接語境界を表している。

（11） 2 音節拡張語

ha]ga ~ ha[ga	a]me ~ a[me
ha=ga	ame
葉=NOM／歯=NOM	雨／飴

（12） 3 音節拡張語

ha[bak]kaj ~ habak[kaj ~ habak[kaj]]	a[me]ga ~ ame[ga	mi[ja]ko ~ mija[ko
ha=baʔkaj	ame=ga	mijako
葉=RST／歯=RST	雨=NOM／飴=NOM	都

髙城（2020: 275-276）

次末音節と最終音節の間で上昇し，音節内部で下降する habak[kaj]] を除くと，上記の例では高音調の位置を数える単位と高音調を担う単位が共に音節である。仮に高音調を担う単位がモーラであれば，（12）の ha[bak]kaj と habak[kaj はそれぞれ haba[k]kaj と habakka[j であることが予測されるが，このような音調は観察されていない。

これはほかの子音が音節末にある場合や，長母音の場合にも同様である。habak[kaj]] のような次末音節と最終音節の間で上昇して音節内部で下降する例は，拡張語の最終音節が閉音節である場合で，かつ音節末子音が N, j のいずれかである場合という音韻論的に限られた環境でのみ観察できる。この例は上記の一般化の例外であり高音調を担う単位は音節であるが，高音調の位置を数える単位はモーラであると分析できる。

2.4 モーラと音節

音韻論的に重要な単位として，モーラ（2.4.1）と音節（2.4.2）を記述する。

2.4.1 モーラ

内之浦方言では音節量の観点から閉音節が 2 種類に区分できる。これはこの方言において（音節のみならず）モーラも重要な単位であることを示している。アクセント体系（2.3 も参照）の観察に基づくと，4 種類の音節末子音 ʔ, ç, N, j （2.1.2.2 も参照）のうち，阻害音の ʔ, ç を持つ音節は短母音を持つ開音節と同じ振る舞いをする。これに対して共鳴音の N, j を持つ音節は長母音を持つ音節と同じ振る舞いをする。具体的には，2 音節以上の拡張語について，前者ではピッチの

音節内下降が観察されないのに対し，後者では観察される。この現象における振る舞いの違いは，前者が短母音を持つ開音節と同じ 1 モーラの軽音節，後者が長母音を持つ音節と同じ 2 モーラの重音節であると解釈することで説明できる。

2.4.2 音節

2.2 で示したように，音節は（C_1）（G）V_1（V_2）（C_2）という構造を持つ。1 つのモーラが 2 つの音節にまたがって実現することはない。2.3 で示したように，内之浦方言のアクセント体系では，高音調の位置を数える単位と高音調を担う単位として音節が参照される。これは，音節が内之浦方言において音韻論的に重要な単位であることを示している。

2.5 形態音韻論

形態音韻現象を記述する。名詞（2.5.1），動詞・形容詞（2.5.2），接語境界（2.5.3）の順で示す。

2.5.1 名詞の形態音韻現象

複合語形成において連濁が見られる。後部要素の初頭が t, k, s, h のときにそれぞれ d, g, z, b に交替する場合がある。上記の条件下で交替が生じない例もあり，詳細は不明である。

（13） 連結音実現規則

a. /to+tana/	→	todana	「戸棚」
b. /kabe+kan/	→	kabegaɴ	「壁紙」
c. /ja+sirusj/	→	jaʑiruç	「矢印」
d. /o+hone/	→	obone	「尾骨」

2.5.2 動詞・形容詞の形態音韻現象

始めに連結音（2.5.2.1）について述べる。次に子音について音節末子音化（2.5.2.2），語根末子音・派生接尾辞末子音の交替（2.5.2.3），接辞初頭子音の有声化（2.5.2.4），重子音化（2.5.2.5）の順で述べる。最後に母音について，母音融合（2.5.2.6），わたり音化（2.5.2.7），短母音化（2.5.2.8）の順で述べる。

2.5.2.1 連結音

接辞境界には連結音（清瀬 1971）が出現することがある。連結子音 $/^{C}/$ と連結母音 $/^{V}/$ を併せて連結音と呼ぶ。連結音は上付き文字で示す。連結音の実現は（14）のように一般化できる。

（14） 連結音実現規則

a. ^{C} → C / V- _　　b. ^{V} → V / C- _

→ Ø / C- _　　→ Ø / V- _

黒木（2015: 33）を一部改変。

すなわち，連結子音 /^{C}/ は母音の直後で子音として実現し，子音の直後では実現しない。連結母音 /^{V}/ は子音の直後で母音として実現し，母音の直後では実現しない。使役接尾辞 /-^{s}ase-/ と否定接尾辞 /-^{a}n-/ の例を（15）と（16）に挙げる。便宜上，語幹のみを示す。

（15） 連結子音（使役接尾辞 /-^{s}ase-/）

a. /kak-^{s}ase-/　→　kak-ase-　（書く-CAUS-）

b. /ko-^{s}ase-/　→　ko-sase-　（来る-CAUS-）

（16） 連結母音（否定接尾辞 /-^{a}n-/）

a. /kak-^{a}n-/　→　kak-an-　（書く-NEG-）

b. /ko-^{a}n-/　→　ko-n-　（来る-NEG-）

2.5.2.2　音節末子音化

接辞の付加により出力される非語頭の狭母音音節は（17）に示すように音節末子音化する。ただし，非語頭に狭母音音節が連続する際には語末に近いほうの音節に規則が適用され，他方には適用されない。さらに，上記の条件を満たしている場合でも，直前の音節が C_2 を持つ場合には適用されない。

語末を例にすると，子音部分が（17a）のように閉鎖音 p, b, t, d, k, g の場合は ʔ ，（17b）のように摩擦音 s, z の場合は ç ，（17c）のように鼻音 m, n の場合は ɴ ，（17d）のようにはじき音 r の場合は ʔ~j となる。このうち（17a, c）の閉鎖音と鼻音は，語中では 2.1.2.2 と 2.1.2.2.3 に示したように直後の音に応じた同化が見られる。なお，実例の規則適用前の形式として挙げているものは必ずしも基底形ではない（以下でも同様）。

（17） 狭母音音節の音節末子音化規則

a. C [−son, −cont] V [+high] → ʔ / V _　ak-u → aʔ　（開く-NPST）

b. C [−son, +cont] V [+high] → ç / V _　hanas-u → hanaç　（話す-NPST）

c. C [+son, +nas] V [+high] → ɴ / V _　jom-u → joɴ　（読む-NPST）

d. r V [+high] → ʔ ~ j / V _　tor-u → toʔ ~ toj　（取る-NPST）

2.5.2.3　語根末子音・派生接尾辞末子音の交替

動詞語根末の子音や派生接尾辞末の子音は，過去接尾辞 /-ta/ ，肯定継起接尾辞 /-te, -t, -tsae/ ，継続接尾辞 /-tjor-/ が接続する際に（18）のように交替する。（18）は過去接尾辞が接続した場合の例を挙げる。（18a）の軟口蓋閉鎖音 /k, g/ と（18b）の摩擦音 /s/ は i ，（18c）の両唇閉鎖音

/b/ は u ~ n, （18d）の両唇軟口蓋接近音 /w/ は u となる[8]。語幹末に摩擦音 /s/ を持つ動詞語幹の一部にはこの環境で i と交替せずに母音語幹と同様の se が現れるものも見られる（5.2.1 も参照）。（18a, c）ではこの規則の適用前に 2.5.2.4 に示す接辞初頭子音の有声化が生じている。（18a, b, c）では 2.5.2.6 に示す母音融合，（18d）では 2.5.2.8 に示す短母音化が併せて生じている。

（18） 末子音交替規則

a. [−son, −cont, +dor] → i / _ -t　korag-da → korai-da → koreda　（乾く-PST）

b. [−son, +cont] → i / _ -t　ok-os-ta → ok-oi-ta → oketa　（起きる-CAUS-PST）

c. [-son, −nas, +lab] → u ~ n / _ -t orob-da → orou-da ~ oron-da → oroda ~oronda（叫ぶ-PST）

d. [+son, −nas, +lab] → u / _ -t　waruw-ta → waruu-ta → waruta　（笑う-PST）

2.5.2.4　接辞初頭子音の有声化

過去接尾辞 /-ta/ ，継起接尾辞 /-te/ ，継続接尾辞 /-tjor-/ の接続先が有声閉鎖音の /b, g/ もしくは鼻音の /m, n/ である場合に，接辞初頭の /t/ が有声化する。

（19） 有声化規則

a.	/tub-ta/	→	tub-da	→	tuu-da	→	tsuda	（飛ぶ-PST）
b.	/korag-ta/	→	korag-da	→	korai-da	→	koreda	（乾く-PST）
c.	/jom-ta/	→	jom-da	→			jonda	（読む-PST）
d.	/sin-ta/	→	sin-da	→			ɕinda	（死ぬ-PST）

2.5.2.5　重子音化

尊敬接尾辞 /-jar-/ のように，初頭に /j/ を持つ形態素の接続先が /j, w/ 以外の子音である場合に，接続先の子音がコピーされる。

（20） 重子音化規則

a.	/kak-jar-/	→	kakkjar-	（書く-HON-）
b.	/ojog-jar-/	→	ojoggjar-	（泳ぐ-HON-）
c.	/jom-jar-/	→	jommjar-	（読む-HON-）
d.	/jom-as-jar-/	→	jomassjar-	（読む-CAUS-HON-）

2.5.2.6　母音融合

現時点で判明している母音融合規則は（21）の通りである。代償延長は生じない。

[8] このほかに，両唇鼻音の /m/ と u の交替が /sizum-/ 「沈む」の 1 例において観察されている。sizuda /sizum-ta/ 「沈んだ」。今後の調査によりさらに見つかる可能性もある。

（21） 母音融合規則

a. ai → e	ak-ta	→	ai-ta	→	eta	（開く-PST）
b. au → o	kak-au	→	kako			（書く-VOL）
c. ou → o	kou-ta	→	kota			（買う- PST）
d. oi → i	ko-i	→	ki			（来る-IMP）
e. ei → i	ak-e-i	→	aki			（開く-CAUS-IMP）
f. ui → i	hiku-i	→	hiki			（低い-NPST）

表 3 に示すように，母音融合規則によって出力される母音 V_3 が前舌であるか後舌であるかは，入力の母音 V_1V_2 のうちの V_2 によって決まり，これを引き継ぐ。狭広については，狭母音を 1，半狭母音を 2，広母音を 3 とおくと，（21a, b, d, e）では入力の V_1 の値が出力の V_3 において 1 つずつ小さくなっており，1 段階ずつ狭くなっていることが表 3 に示されている。この一般化の例外となる（21c, f）のうち（21f）では入力の V_1 の時点で値がすでに 1 であり，これ以上狭くなることができないために 1 のまま出力されると考える。（21c）は入力の母音 V_1V_2 の値の差が 1 段階であって V_2 が後舌である唯一の例である。この環境で V_1 の値と V_3 の値が等しい理由は不明である。

表 3　母音融合規則の詳細

	狭広	前(f)後(b)
a.　ai → e	3+1 → 2	b+f → f
b.　au → o	3+1 → 2	b+b → b
c.　ou → o	2+1 → 2	b+b → b
d.　oi → i	2+1 → 1	b+f → f
e.　ei → i	2+1 → 1	f+f → f
f.　ui → i	1+1 → 1	b+f → f

2.5.2.7　母音 i のわたり音化

子音と u の間に挟まれた i はわたり音化規則によってわたり音となる。

（22） わたり音化規則

iu → ju　　tanosi-u → tanoɕu　　（楽しい-ADV）

2.5.2.8　短母音化

接辞付加によって形成された母音連続には短母音化規則が適用される。ee, aa の例は見つかっていない。

（23） 短母音化規則

a. ii → i　　tanosi-i → tanoɛi　　（楽しい-NPST）

b. uu → u　　tuu-da → tsuda　　（飛ぶ-NPST）

c. oo → o　　ko-o → ko　　（買う-VOL）

2.5.3 接語境界における形態音韻現象

接語境界で形態音韻現象が観察されているのは，主題の /=^{w}a/ ，与格の /=^{n}i/ ，属格の /=n_o/ ，対格の /=u_o/ の 4 つが付加されるときである。主題と与格の基底形にある上付きの /^{w}/ と /^{n}/ は，接辞について 2.5.2.1 で述べたものと同じく連結音である。属格と対格の基底形にある下付きの /$_o$/ は，連結音に倣って両接語の異形態の派生過程を記述するために暫定的に用いているものである。連結音と同じく接続先の音韻環境に応じて，下付き文字部分の実現の有無が決まる。上記の 4 つの接語はそれぞれ表 4 に示す異形態を持つ。

表 4　接語の異形態と異形態 1 の選択条件

機能	基底形	異形態 1	異形態 2	異形態 1 の選択条件
主題	=^{w}a	=wa	=a	接続先の基底形が母音で終わる
与格	=^{n}i	=ni	=i	接続先の基底形が末尾に母音連続を持つ
属格	=n_o	=no	=n	接続先の表層形が子音で終わる
対格	=u_o	=o	=u	接続先の表層形が母音で終わる

このうち対格の異形態 1 では接続先の表層形が母音終わりの場合に， o が実現することでまず =uo が得られる。内之浦方言では同一音節内に異なる母音の連続が存在しない。したがってこの構造を回避するために u の子音化によって =wo が生じる。ただし，内之浦方言で w と o は共起しないため，出力は w が削除された =o となる（2.1.2.1 も参照）。

接語境界の形態音韻規則は（24）の順に適用される。

（24） 連結音実現→重子音化→再音節化→ j 削除→音節末子音化→ o 実現→ w 削除

語根末の音韻環境が異なる 7 つの名詞について，主題（表 5），与格（表 6），属格（表 7），対格（表 8）の各接語を付加した際の規則の適用過程を示す。各表中の「→」は，当該の規則が当該の音韻環境を持つ名詞に適用されないことを示す。

2.5.3.1 主題接語境界における形態音韻規則

主題接語では接続先の名詞の基底形が母音で終わる際に連結音が実現する（異形態として =wa が選択される）。接続先の名詞の基底形が子音で終わる際には連結音が実現しない（異形態として =a が選択される）。ただし，異形態として=wa が選択される場合にも，表層で母音に

後続する際には w が削除されることがある。これは母音間の w において自由変異として観察される。

表 5　名詞と主題接語の間の形態音韻規則と適用過程

	基底	連結音実現	重子音化	再音節化	音節末子音化	w 削除	表層
靴	kutj=^{w}a	kutj=a	→	kutja	→	→	kutɕa
火事	kazj=^{w}a	kazj=a	→	kazja	→	→	kaʑa
海	un=^{w}a	un=a	un=na	→	→	→	unna
冬	huj=^{w}a	huj=a	→	huja	→	→	ɸuja
猿	sai=^{w}a	sai=wa	→	→	saj=wa	→	sajwa
声	koe=^{w}a	koe=wa	→	→	→	koe=a	koea
毛布	moohu=^{w}a	moohu=wa	→	→	→	moohu=a	moːɸua

「海」は基底形が /un/ であり，子音で終わるため主題接語は =a が選択される。表 5 では直前の音節が尾子音を持つために，頭子音のない音節を回避するための重子音化が生じている（重子音化については 2.5.2.5 も参照）。「靴」や「火事」や「冬」も子音で終わるため主題接語は =a が選択される。ただし，これらの名詞は語末が j であり，この場合には重子音化が生じない。これは重子音化が C_2 と後続音節の C_1 の間で生じる現象であるためと考えられる。2.2 で述べたとおり j は C_1 のスロットには入らないため，重子音化が生じない。「靴」や「火事」や「冬」では重子音化が生じない際の次善策として再音節化が生じていると考える。なお，主題標識が仮に /=ia/ であれば，「靴」と「火事」の名詞の基底形をそれぞれ /kut/, /kaz/ と設定することになるが，この場合にはこの環境で重子音化が生じない理由が説明できなくなるため，/kutj/, /kazj/ のように語末に /j/ を持つと考える妥当性が高い。

「冬」と「猿」は単独で発音すると ɸuj と saj であり，語末に音節末接近音を持つ。このうち「冬」は「靴，火事，海」と同様に主題標識が =a として実現しているため，基底形が子音の /j/ で終わっていると解釈される。一方「猿」は「声」や「毛布」と同様に主題標識が =wa として実現しているため，基底形が母音の /i/ で終わっていると解釈される。

2.5.3.2　与格接語境界における形態音韻規則

与格接語では接続先の名詞の基底形が末尾に母音連続を持つ際に連結音が実現する（異形態として =ni が選択される）。接続先の名詞の基底形が末尾に母音連続を持たない際には連結音が実現しない（異形態として =i が選択される）。再音節化によって同一音節内に ji が出現する場合，音素配列規則を満たすために j が削除される（2.1.2.1 も参照）。

表 6　名詞と与格接語の間の形態音韻規則と適用過程

	基底	連結音実現	重子音化	再音節化	j 削除	音節末子音化	表層
靴	kutj=^{n}i	kutj=i	→	kutji	kuti	→	kutɕi
火事	kazj=^{n}i	kazj=i	→	kazji	kazi	→	kaʑi
海	un=^{n}i	un=i	un=ni	→	→	→	unni
冬	huj=^{n}i	huj=i	→	huji	hui	huj	ɸuj
猿	sai=^{n}i	sai=ni	→	→	→	saj=ni	sajni
声	koe=^{n}i	koe=ni	→	→	→	→	koeni
毛布	moohu=^{n}i	moohu=i	→	→	→	moohu=j	moːɸuj

2.5.3.3　属格接語境界における形態音韻規則

属格接語では接続先の名詞の表層形が子音で終わる際に，異形態として =no が選択される。接続先の名詞の表層形が母音で終わる際には異形態として =n が選択される。

表 7　名詞と属格接語の間の形態音韻規則と適用過程

	基底	音節末子音化	o 実現	表層
靴	kutj=n_o	kut=n_o	kut=no	kutˀno
火事	kazj=n_o	kas=n_o	kas=no	kaçno
海	un=n_o	→	un=no	unno
冬	huj=n_o	→	huj=no	ɸujno
猿	sai=n_o	saj=n_o	saj=no	sajno
声	koe=n_o	→	koe=n	koeɴ
毛布	moohu=n_o	→	moohu=n	moːɸuɴ

2.5.3.4　対格接語境界における形態音韻規則

対格接語では接続先の名詞の表層形が母音で終わる際に，異形態として =o が選択される。接続先の名詞の表層形が子音で終わる際には異形態として =u が選択される。

表 8　名詞と対格接語の間の形態音韻規則と適用過程

	基底	重子音化	再音節化	j 削除	o 実現	w 削除	表層
靴	kutj=u_o	→	kutju_o	kutu_o	kutu	→	kutsu
				→	kutju	→	kutɕu
火事	kazj=u_o	→	kazju_o	kazu_o	kazu	→	kazu
				→	kazju	→	kaʑu
海	un=u_o	un=nu$_o$	→	→	un=nu	→	unnu
冬	huj=u_o	→	huju_o	→	huju	→	ɸuju
猿	sai=u_o	→	saju_o	→	saju	→	saju
声	koe=u_o	→	→	→	koe=wo	koe=o	koeo
毛布	moohu=u_o	→	→	→	moohu=wo	moohu=o	mo:ɸuo

「靴」と「火事」では発音に揺れがあることを示している。これは再音節化と o 実現の間で j 削除が生じるか否かという揺れであると解釈される。j 削除の詳細な条件は不明である。

3.　記述の単位

内之浦方言の語・接辞・接語を音韻論的な自立性と形態統語論的な自立性の両面から表 9 のように定義する[9]。

表 9　語・接辞・接語

	形態統語論的に自立	形態統語論的に従属
音韻論的に自立	語	
音韻論的に従属	接語	接辞

すなわち，語は音韻論的にも形態統語的にも自立した単位である。接辞は音韻論的にも形態統語的にも従属した単位である。接語は音韻論的に従属しており形態統語論的には自立している単位である。音韻論的な自立性は独立したアクセント単位を成すか否かを基準とする。

4.　名詞の形態論

本節では名詞の形態論を記述する。

4.1　名詞の内部構造

名詞は（25）に示す内部構造を持つ。

[9] 下地（2018）を参考にした。

（25）　（接頭辞-）語根（-接尾辞）

このうち接頭辞については 4.1.1 で，接尾辞については 4.1.2 で記述する。

4.1.1　接頭辞

接頭辞には（26）のように丁寧を表す /o-/ がある。

（26）	a.	kaç	b. okaç
		kasj	o-kasj
		菓子	お菓子

4.1.2　接尾辞

接尾辞には（27）のように複数を表す /-dom/ と /-tatj/ がある。両者の使い分けについての詳細は不明である。（27d, e）に示すように，両者は /-dom-tatj/ の順で共起することもできる。この場合にもいずれか単独の場合と同じく複数を表す。なお，（27d）のように言う場合は（27b, c）のように言う場合より人数が多いという直観を持つ話者もいる。

（27）	a.	/ataj/	→	ataj	（私.SG）
	b.	/ataj-dom/	→	atajdoɴ	（私-PL）
	c.	/ataj-tatj/	→	atajtaʔ	（私-PL）
	d.	/ataj-dom-tatj/	→	atajdontaʔ	（私-PL-PL）
	e.	*/ataj-tatj-dom/	→	atajtaddoɴ	（私-PL-PL）

ここで複数接尾辞の /-dom/ の基底形をこのように設定しているのは，（28）のような接語を付けた際の表層形に m が現れるためである。（主題接語境界における形態音韻規則については 2.5.3.1 も参照。）

（28）	a.	/ataj-dom/	→	atajdoɴ	（私-PL）（=20b）
	b.	/ataj-dom=^{w}a/	→	atajdoma	（私-PL=TOP）
	c.	/ataj-dom=^{n}i/	→	atajdomi	（私-PL=DAT）
	d.	/ataj-dom=u$_{o}$/	→	atajdomu	（私-PL=ACC）

（29）に示す /saj-don/ 「お猿さん」などに用いられる敬称接尾辞の /-don/ と比べることで，この振る舞いに基づくことの妥当性がより明確になる。

（29）	a.	/saj-don/	→	sajdoɴ	（猿-TTL）

b. /saj-don=ʷa/ → sajdonna （猿-TTL=TOP）
c. /saj-don=ⁿi/ → sajdonni （猿-TTL=DAT）
d. /saj-don=uₒ/ → sajdonnu （猿-TTL=ACC）

（29）に例として挙げた人称代名詞のほかにも /akira/ 「あきら」のような人物名には /-dom/ と /-tatj/ のどちらも接続できる。これに対して， /in/ 「犬」や /o-kasj/ 「お菓子」のように有生性が低いものには接続できない。内之浦方言では（30）のように /si/ で「複数の人」を表すこともできる（語として実現する場合と接語として実現する場合がある）。この形式も（31）のように複数接尾辞と共起する。（（30a, b）中の属格接語については 2.5.3 も参照。）

（30） a. /otoko=nₒ si/ → otokoɴ ɕi （男=GEN　人々）
b. /kodon=nₒ si/ → kodonno ɕi （子供=GEN　人々）
c. /kon=si/ → koɴɕi （この=人々）
（31） a. /kon=si-dom/ → koɴɕidoɴ （この=人々-PL）
b. /kon=si-tatj/ → koɴɕitaʔ （この=人々-PL）
c. /kon=si-dom-tatj/ → koɴɕidontaʔ （この=人々-PL-PL）

4.2 代名詞

人称代名詞と指示代名詞を記述する。

4.2.1 人称代名詞

人称代名詞の体系を表 10 に示す。表中の語例は基底形である。

表 10　人称代名詞の体系

1 人称		2 人称	
単数	複数	単数	複数
ataj	ataj-dom/ataj-tatj/ataj-dom-tatj	ohan	ohan-dom/ohan-tatj/ohan-dom-tatj
oj	oj-dom/oj-tatj/oj-dom-tatj	omaj	omaj-dom/omaj-tatj/omaj-dom-tatj
		waʔko	waʔko-dom/waʔko-tatj/waʔko-dom-tatj

1 人称・2 人称ともに複数接尾辞が付かない形では単数のみを表す。1 人称代名詞は男女問わず /ataj/ と /oj/ の両方が使用される。両者の使い分けについての詳細は不明であるが，聞き手が目下か親しい者の場合に /oj/ が /ataj/ より使用されやすい傾向がありそうである。2 人称代名詞のうち /ohan/ は目上に対してのみ使用される。 /omaj/ は目上に対しても同等や目下に対しても使用される。 /waʔko/ は同等と目下に対してのみ使用される。

4.2.2　指示代名詞

指示代名詞を含む指示語については 8.1 を参照。

4.2.3　疑問代名詞

疑問代名詞を含む疑問語については 8.2 を参照。

4.3　数詞

現時点で明らかになっている数詞の体系を表層形で表 11 に示す。「基本」は数を数えるときに用いる形式，「人」は人を数えるときに用いる形式，「日」は日数を数えるときに用いる形式である。空欄は未確認の項目である。「日」の列のうちスラッシュがある項目ではスラッシュの右側に概ね 70 歳以下の話者の言い方であるとして挙げられたものも併記している。

表 11　数詞の体系

	基本 1	基本 2	人	日
0	rej		rejniɴ	
1	çitoʔ	iʔ	çitoj	
2	ɸutaʔ	ni	ɸutaj	ɸukka
3	mittsu	saɴ	sanniɴ	mikka
4	jottsu	ɕi	joniɴ	jokka
5	itsuʔ	go	goniɴ	ikka/gontɕi
6	muttsu	roʔ	rotniɴ	mujka/rokuntɕi
7	nanaʔ	çiʔ	çitniɴ	naŋka/çitɕintɕi
8	jaʔ	haʔ	hatniɴ	joːka/hatɕintɕi
9	kokonoʔ	ku	kuniɴ	kokoŋka/kuntɕi
10	toː	ʑuː	ʑuniɴ	toːka
11	ʑuiʔ		ʑuitniɴ	
12	ʑuni		ʑuninɪɴ	

5.　動詞の形態論

本節では動詞の形態論を記述する。

5.1　動詞の内部構造

動詞は（32）に示す内部構造を持つ。

（32）　（派生接頭辞-）語根（-派生接尾辞）-屈折接尾辞

このうち屈折については 5.3 で，派生については 5.4 で記述する。

5.2　語幹クラス

語幹は，語根と 0 個以上の派生接辞で構成され，屈折接尾辞の接続先となる。動詞語幹は子音語幹，母音語幹，変格活用語幹の 3 つに大別される。子音語幹については 5.2.1 で，母音語幹については 5.2.2 で，変格活用語幹については 5.2.3 で記述する。

5.2.1　子音語幹

子音語幹は基底形が子音で終わる。子音の種類によって（33）の 9 つに下位分類できる。

（33）　b 語幹（/tub-/ 「飛ぶ」など），t 語幹（/tat-/ 「立つ」など），
k 語幹（/kak-/ 「書く」など），g 語幹（/korag-/ 「乾く」など），
s 語幹（/kas-/ 「貸す」など），m 語幹（/jom-/ 「読む」など），n 語幹（/sin-/ 「死ぬ」），
r 語幹（/tor-/ 「取る」など），w 語幹（/kow-/ 「買う」など）

子音語幹の下位クラスでは，肯定過去接尾辞 /-ta/ や継起接尾辞 /-t/ などが付加された際にそれぞれ異なる形態音韻論的振る舞いが見られる。振る舞いの違いについては 5.3.1.2 で詳述する（2.5.2 も参照）。（33）に挙げたのはすべて動詞語根が派生接尾辞を介さず直接屈折接尾辞に接続する場合（すなわち，動詞語根が語幹末にある場合）の例である。派生接尾辞のうち，子音語幹を形成するものには s 語幹の使役接尾辞 /-^{s}as-, -os-, -^{a}kas-/ ，r 語幹の継続接尾辞 /-tjor-, -gor-/ などがある（使役接尾辞については 5.4.2，継続接尾辞については 5.4.4 を参照）。

5.2.2　母音語幹

母音語幹は基底形が母音 e または u で終わる[10]。動詞語根もしくは語幹のみを表示する際には，区別が必要な場合を除き便宜上 e で代表させる。/kure-/ 「くれる」などが見つかっている。語幹末にある派生接尾辞のうち，母音語幹のものには使役接尾辞 /-e-, -^{s}ase-/ と受動接尾辞 /-^{r}are-/ などがある（5.4.2 と 5.4.3 も参照）。

[10] otsuʔ /otu-^{r}u/「落ちる-NPST」や dekuʔ /deku-^{r}u/「できる-NPST」は基底形が e または u で終わる母音語幹，okiʔ /okir-^{r}u/「起きる-NPST」や miʔ /mir-^{r}u/「見る-NPST」や deʔ /der-^{r}u/「出る-NPST」は r 語幹である。過去接尾辞や否定接尾辞を付けた形はそれぞれ「落ちる」が oteta, oteɴ ，「できる」が deketa, dekeɴ ，「起きる」が okitta, okiraɴ ，「見る」が mitta, miraɴ ，「出る」が detta, deraɴ である。ただし，「見る」が補助動詞として用いられる際には過去接尾辞を付けた mita /mi-ta/ や命令接尾辞を付けた mi /mi-^{a}i/ （本動詞としては mire /mir-^{a}i/）のように語幹が i で終わる母音語幹と解釈される例も見つかっている。

5.2.3　変格活用語幹

変格活用語幹は動詞語根 /ko-, ki, ku-/「来る」と /se-, si-, su-, s-/「する」の 2 つである。それぞれ複数の基底形を持ち，接辞との組み合わせが決まっている（5.3 と 5.4 で示す語例も参照）。動詞語根のみを表示する際には，区別が必要な場合を除き便宜上 /ko-/ と /se-/ でそれぞれ代表させる。

5.3　屈折形態論

動詞語幹に接続する屈折接尾辞の基底形を表 12 に示す。上付き文字の子音は連結子音であり，上付き文字の母音は連結母音である（連結音については 2.5.2.1 も参照）。

表 12　動詞の屈折接尾辞

			肯定	否定
定動詞	直説法	非過去	-^{r}u	(-^{a}n-i)
		過去	-ta	(-^{a}n-ikar-ta)
	意志法		-^{a}u	-me
	命令法		-^{a}i	-^{t}na
副動詞		継起形	-te, -t, -tsae	-^{a}zi, -^{a}nzi
		条件形	-^{r}eba	
		目的形	-ke	

定動詞は文を終止でき，名詞修飾にも用いられる。副動詞は副詞節を構成し，定動詞を修飾する。定動詞は法で屈折する。このうち直説法は時制でも屈折し，意志法と命令法は極性でも屈折する。副動詞では継起形が極性で屈折する。定動詞の直説法は極性では屈折せず，非過去の否定は派生接尾辞の /-^{a}n-/ が形容詞の非過去屈折接尾辞 /-i/ をとることで表す（否定接尾辞については 5.4.6 も参照）。過去の否定は派生接尾辞の /-^{a}n-/ が通常形容詞語根に接続する派生接尾辞である動詞語幹化接尾辞 /-ikar-/ をとり，これが動詞の過去接尾辞を取ることで表す（形容詞の形態論については第 6 節も参照）。

5.3.1　直説法

肯定の非過去（5.3.1.1），過去（5.3.1.2）を記述する。

5.3.1.1　非過去

非過去の /-^{r}u/ は語幹末が子音の場合 -u として実現し，語幹末が母音の場合 -ru として実現する。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /kuru-/ 「くれる」，変格活用語幹の /ku-/ 「来る」と /su-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（34）に示す（2.5.2.2 の音節末子音化規則も参照）。

（34） 非過去

a.	/kak-ʳu/	→	kak-u	→	kaʔ	（書く-NPST）
b.	/kuru-ʳu/	→	kuru-ru	→	kuruʔ	（くれる-NPST）
c.	/ku-ʳu/	→	ku-ru	→	kuʔ	（来る-NPST）
d.	/su-ʳu/	→	su-ru	→	suʔ	（する-NPST）

5.3.1.2 過去

過去の /-ta/ は語幹末が有声閉鎖音の /b, g/ もしくは鼻音の /m, n/ である場合に，接辞初頭の /t/ が有声化することで da として実現する（2.5.2.4 も参照）。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /kure-/ 「くれる」，変格活用語幹の /ki-/ 「来る」と /si-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（35）に示す。

（35） 過去

a.	/kak-ta/	→	kai-ta	→	keta	（書く-PST）
b.	/kure-ta/	→	kure-ta	→	kureta	（くれる-PST）
c.	/ki-ta/	→	ki-ta	→	kita	（来る-PST）
d.	/si-ta/	→	si-ta	→	ɕita	（する-PST）

過去では, 子音語幹の下位クラスごとに異なる形態音韻論的振る舞いが見られる。これは 5.3.4.1 の肯定継起接尾辞と 5.4.4 の継続接尾辞でも同様である（2.5.2.3 も参照）。このうち s 語幹ではこの環境で 2 種類の振る舞いが見られる。すなわち，（36e）のように語幹末子音が i と交替するものと，（36f）のように語幹末に母音語幹と同様の se が現れるものの 2 種類である。「消す-PST」では keta /kes-ta/ という形も観察されているのに対し，「貸す-PST」では kaseta /kas-ta/ のような形は観察されていない。両方の振る舞いが見られる s 語幹としては oketa ~ okoseta /ok-os-ta/ 「起きる-CAUS-PST」や toeta ~ to:seta /toos-ta/ 「通す-PST」も見つかっているが，この現象についての詳細な条件等は不明である。

（36） 過去

a.	b 語幹	/tub-ta/	→	tuu-da	→	tsuda	（飛ぶ-PST）
b.	t 語幹	/tat-ta/	→	tat-ta	→	tatta	（立つ-PST）
c.	k 語幹	/kak-ta/	→	kai-ta	→	keta	（書く-PST） （=34a）
d.	g 語幹	/korag-ta/	→	korai-da	→	koreda	（乾く-PST）
e.	s 語幹	/kas-ta/	→	kai-ta	→	keta	（貸す-PST）
f.	s 語幹	/kes-ta/	→	kese-ta	→	keseta	（消す-PST）
g.	m 語幹	/jom-ta/	→	jom-da	→	jonda	（読む-PST）

h. n 語幹 /sin-ta/ → sin-da → ɕinda （死ぬ-PST）

i. r 語幹 /tor-ta/ → tot-ta → totta （取る-PST）

j. w 語幹 /kow-ta/ → kou-ta → kota （買う-PST）

5.3.2 意志法

肯定意志形の /-ᵃu/ は語幹末が子音の場合 -au を経て -o として実現し，語幹末が母音の場合 -u として実現する。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /kuru-/ 「くれる」，変格活用語幹の /ku-/ 「来る」と /su-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（37）に示す。否定意志形の /-me/ については現時点では網羅的な調査ができておらず，接語である可能性も残っている。

（37） 意志肯定形

a. /kak-ᵃu/ → kak-au → kako （書く-VOL）

b. /kuru-ᵃu/ → kuru-u → kuru （くれる-VOL）

c. /ku-ᵃu/ → ku-u → ku （来る-VOL）

d. /su-ᵃu/ → su-u → su （する-VOL）

5.3.3 命令法

肯定命令形（5.3.3.1）と否定命令形（5.3.3.2）を記述する。

5.3.3.1 肯定命令形

肯定命令形の /-ᵃi/ は語幹末が子音の場合 -ai を経て -e として実現し，語幹末が母音の場合 -i として実現する。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /kure-/ 「くれる」，変格活用語幹の /ko-/ 「来る」と /se-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（38）に示す。

（38） 肯定命令形

a. /kak-ᵃi/ → kak-ai → kake （書く-IMP）

b. /kure-ᵃi/ → kure-i → kuri （くれる-IMP）

c. /ko-ᵃi/ → ki-i → ki （来る-IMP）

d. /se-ᵃi/ → si-i → ɕi （する-IMP）

5.3.3.2 否定命令形（禁止形）

否定命令形（禁止形）の /-ᵗna/ は語幹末が子音の場合 -na として実現し，語幹末が母音の場合 -tna として実現する。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /kuru-/ 「くれる」，変格活用語幹の /ku-/ 「来る」と /su-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（39）に示す。

（39） 否定命令形（禁止形）[11]

a. /kak-ᵗna/	→	kak-na	→	katna	（書く-PROH）
b. /kuru-ᵗna/	→	kuru-tna	→	kurutna	（くれる-PROH）
c. /ku-ᵗna/	→	ku-tna	→	kutna	（来る-PROH）
d. /su-ᵗna/	→	su-tna	→	sutna	（する-PROH）

5.3.4 副動詞

副動詞の継起形（5.3.4.1），条件形（5.3.4.3），目的形（5.3.4.4）を記述する。

5.3.4.1 肯定継起形

肯定継起形として挙げている 3 つの接辞の使い分けの詳細は不明である。いずれの接辞においても 5.3.1.2 で示した過去接尾辞と同様に，子音語幹の下位クラスごとに異なる形態音韻論的振る舞いが見られる。肯定継起接尾辞のうち /-tsae/ の初頭の /t/ は音節末子音として実現する（動詞「書く」の語根に接続した例：/kak-tsae/ → kai-tsae → kessae）。 /-te/ は語幹末が有声閉鎖音の /b, g/ もしくは鼻音の /m, n/ である場合に，接辞初頭の /t/ が有声化することで de として実現する（2.5.2.4 も参照）。/-te/ は否定接尾辞 /-ᵃn-/ に接続して否定継起を表すことも可能である（実現形は -ande もしくは -nde）。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /kure-/ 「くれる」，変格活用語幹の /ki-/ 「来る」と /si-/ 「する」に肯定継起形の 1 つである /-t/ がそれぞれ接続した例を（40）に示す。

（40） 肯定継起形

a. /kak-t/	→	kai-t	→	keʔ	（書く-SEQ）
b. /kure-t/	→	kure-t	→	kureʔ	（くれる-SEQ）
c. /ki-t/	→	ki-t	→	kiʔ	（来る-SEQ）
d. /si-t/	→	si-t	→	ɕiʔ	（する-SEQ）

5.3.4.2 否定継起形

否定継起形として挙げている 2 つの接辞の使い分けの詳細は不明である。否定継起形の /-ᵃzi, -ᵃnzi/ は語幹末が子音の場合 -aʑi, -aɴʑi として実現し，語幹末が母音の場合 -ʑi, -ɴʑi として実現する。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /tuke-/ 「付ける」に /-ᵃnzi/ それぞれ接続した例を（41）に示す。

（41） 否定継起形

/kak-ᵃnzi/	→	kak-anzi	→	kakaɴʑi	（書く-NEG.SEQ）

[11] /-ᵗna/ は動詞語幹にしか接続せず，終助詞などとは異なり，keta /kak-ta/ 「書く-PST」のような他の屈折接尾辞や他の品詞に接続することがないため，接語とは分析しない。

/tuke-^{a}nzi/ → tuke-nzi → tsukeɴzi （付ける-NEG.SEQ）

5.3.4.3 条件形

条件形の /-^{r}eba/ は語幹末が子音の場合 -eba として実現し，語幹末が母音の場合 -reba として実現する。子音語幹の /kak-/ 「書く」，母音語幹の /kuru-/ 「くれる」，変格活用語幹の /ku-/ 「来る」と /su-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（42）に示す。

（42） 条件形

a. /kak-^{r}eba/ → kak-eba → kakeba （書く-COND）
b. /kuru-^{r}eba/ → kuru-reba → kurureba （くれる-COND）
c. /ku-^{r}eba/ → ku-reba → kureba （来る-COND）
d. /su-^{r}eba/ → su-reba → sureba （する-COND）

5.3.4.4 目的形

目的形は /-ke/ である。「行く」や「来る」のような移動動詞と共起して，「～しに行く」や「～しに来る」のように移動の目的を表す。子音で終わる /kak-/ 「書く」と母音で終わる /ak-e-/ 「開ける」， /si-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（43）に示す。なお，「来る」の例は得られなかった。

（43） 目的形

a. /kak-ke/ → kakke （書く-PUR）
b. /ak-e-ke/ → akeke （開く-CAUS-PUR）
c. /si-ke/ → sike （する-PUR）

5.4 派生形態論

動詞語幹は（44）に示す内部構造を持つ。

（44） （接頭辞-）語根（-使役）（-受動）（-継続）（-尊敬）（-否定）

接頭辞については 5.4.1 で，使役，受動，継続，尊敬，否定の各派生接尾辞については 5.4.2-5.4.6 で記述する。

5.4.1 接頭辞

接頭辞には（45）-（49）に示すように /ke-, ut-, it-, hat-, hit-, tun-/ が見つかっている。このうち /hat-, hit-/ は鼻音始まりの動詞語根に接続する際には，それぞれ han-, hin- として実現する。

話者の 1 人によると，接頭辞がある場合にはいずれの接頭辞であっても「強調しているように感じる」そうである。接頭辞の機能についての詳細な記述は今後の課題である。

（45）-（49）では動詞の非過去を例として挙げている。2.5.2.2 で示したように，接辞付与に際して生じる形態音韻規則のうち， ru に音節末子音化規則がかかる場合，出力に ʔ と j の揺れが見られる。下記では便宜上，調査の際にそれぞれ第一回答として得られたものを代表形として挙げる。

（45） a. ɕiɴ　　b. keɕiɴ
sin　　ke-sin
死ぬ.NPST　　PFX-死ぬ.NPST

（46） a. kuzuruj　　b. ukkuzuruj
kuzuruj　　ut-kuzuruj
崩れる.NPST　　PFX-崩れる.NPST

（47） a. tokuj　　b. ittokuj
tokuj　　it-tokuj
溶ける.NPST　　PFX-溶ける.NPST

（48） a. dej　　b. haddej
dej　　hat-dej
出る.NPST　　PFX-出る.NPST

（49） a. neʔ　　b. çinneʔ　　c. tsunneʔ
neʔ　　hin-neʔ　　tun-neʔ
寝る.NPST　　PFX-寝る.NPST　　PFX-寝る.NPST

5.4.2　使役接尾辞

使役接尾辞には /-^{s}ase-, -^{s}as-, -os-, -^{a}kas-, -e-/ が見つかっている。ここには /ak-e-^{s}ase-^{r}u/ 「開けさせる」の /-e-^{s}ase-/ ように使役接尾辞同士で共起することが可能なものも含まれる。本稿では，生産性が高く調査が最も進んでいる /-^{s}ase-/ を主に取り上げる。この接尾辞は，接続先（動詞語根末もしくは使役接尾辞末）が子音の場合 -ase- として実現し，接続先が母音の場合 -sase- として実現する。子音で終わる /kak-/ 「書く」と /s-/ 「する」，母音で終わる /ak-e-/ 「開ける」，/ko-/ 「来る」にそれぞれ接続した例を（50）に示す。

（50） 使役接尾辞

a. /kak-^{s}ase-/ → kak-ase- → kakase- （書く-CAUS-）
b. /s-^{s}ase-/ → s-ase- → sase- （する-CAUS-）
c. /ak-e-^{s}ase-/ → ak-e-sase- → akesase- （開く-CAUS-CAUS-）
d. /ko-^{s}ase-/ → ko-sase- → kosase- （来る-CAUS-）

5.4.3　受動接尾辞

受動接尾辞は /-^{r}are-/ である。接続先（動詞語根末もしくは使役接尾辞末）が子音の場合 -are- として実現し，接続先が母音の場合 -rare- として実現する。子音で終わる /kak-/ 「書く」と /s-/ 「する」，母音で終わる /ak-e-/ 「開ける」， /ko-/ 「来る」にそれぞれ接続した例を（51）に示す。

（51） 受動接尾辞

a. /kak-^{r}are-/	→	kak-are-	→	kakare-	（書く-PASS-）
b. /s-^{r}are-/	→	s-are-	→	sare-	（する-PASS-）
c. /ak-e-^{r}are-/	→	ak-e-rare-	→	akerare-	（開く-CAUS-PASS-）
d. /ko-^{r}are-/	→	ko-rare-	→	korare-	（来る-PASS-）

5.4.4　継続接尾辞

継続接尾辞には /-tjor-, -gor-/ が見つかっている。このうち /-tjor-/ では 5.3.1.2 で示した過去接尾辞と同様に，子音語幹の下位クラスごとに異なる形態音韻論的振る舞いが見られる。さらに語幹末が有声閉鎖音の /b, g/ もしくは鼻音の /m, n/ である場合に，接辞初頭の /t/ が有声化することで zjor として実現する（2.5.2.4 も参照）。両者の使い分けについての詳細は不明である。ただし， /-tjor-/ が動作継続としても結果継続としても使われることが多数の動詞で確認できているのに対し， /-gor-/ は動作継続で 2 例確認できているのみである。子音で終わる /kak-/ 「書く」と母音で終わる /ak-e-/ 「開ける」， /ko-/ 「来る」，/se-/ 「する」に継続形の 1 つである /-tjor-/ がそれぞれ接続した例を（52）に示す。

（52） 継続接尾辞

a. /kak-tjor-/	→	kai-tjor-	→	ketjor-	（書く-PROG-）
b. /ak-e-tjor-/	→	ak-e-tjor-	→	aketjor-	（開く-CAUS-PROG-）
c. /ki-tjor-/	→	ki-tjor-	→	kitjor-	（来る-PROG-）
d. /si-tjor-/	→	si-tjor-	→	sitjor-	（する-PROG-）

5.4.5　尊敬接尾辞

尊敬接尾辞は /-jar-/ である。子音で終わる /kak-/ 「書く」と母音で終わる /ak-e-/ 「開ける」，/ko-/ 「来る」，/se-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（53）に示す。（53a）では 2.5.2.5 に示した重子音化が生じている。

（53） 尊敬接尾辞

a. /kak-jar-/	→	kakkjar-	（書く-HON-）

b. /ak-e-jar-/ → akejar- （開く-CAUS-HON-）
c. /ki-jar-/ → kijar- （来る-HON-）
d. /si-jar-/ → sijar- （する-HON-）

5.4.6 否定接尾辞

否定接尾辞は /-ᵃn-/ である。接続先（動詞語根末もしくは他の派生接尾辞末）が子音の場合 -an- として実現し，接続先が母音の場合 -n- として実現する。子音で終わる /kak-/ 「書く」と母音で終わる /ak-e-/ 「開ける」， /ko-/ 「来る」，/se-/ 「する」にそれぞれ接続した例を（54）に示す。

（54） 否定接尾辞
a. /kak-ᵃn-/ → kak-an- → kakan- （書く-NEG-）
b. /ak-e-ᵃn-/ → ak-e-n- → aken- （開く-CAUS-NEG-）
c. /ko-ᵃn-/ → ko-n- → kon- （来る-NEG-）
d. /se-ᵃn-/ → se-n- → sen- （する-NEG-）

否定非過去は派生接尾辞の /-ᵃn-/ が形容詞の非過去屈折接尾辞 /-i/ をとることで表す。否定過去は派生接尾辞の /-ᵃn-/ が通常形容詞語根に接続する動詞語幹化接尾辞 /-ikar-/ をとり，これが動詞の過去屈折接尾辞 /-ta/ をとることで表す（形容詞の形態論については第 6 節も参照）。すなわち，否定非過去は /-ᵃn-i/ であり，否定過去は /-ᵃn-ikar-ta/ である。それぞれ接続先が子音の場合 -aN, -aŋkkatta として実現し，接続先が母音の場合 -N, -ŋkatta として実現する。子音で終わる /kak-/ 「書く」と母音で終わる /ak-e-/ 「開ける」，/ko-/ 「来る」， /se-/ 「する」に否定非過去の /-ᵃn-i/ がそれぞれ接続した例を（55）に示し，否定過去の /-ᵃn-ikar-ta/ がそれぞれ接続した例を（56）に示す（2.5.2.2 の音節末子音化規則も参照）。

（55） 否定非過去
a. /kak-ᵃn-i/ → kak-an-i → kak-an → kakaN （書く-NEG-NPST）
b. /ak-e-ᵃn-i/ → ak-e-n-i → ak-e-n → akeN （開く-CAUS-NEG-NPST）
c. /ko-ᵃn-i/ → ko-n-i → ko-n → koN （来る-NEG-NPST）
d. /se-ᵃn-i/ → se-n-i → se-n → seN （する-NEG-NPST）

（56） 否定過去
a. /kak-ᵃn-ikar-ta/ → kak-an-ikar-ta → kak-ankar-ta → kakaŋkatta （書く-NEG-VLZ-NPST）
b. /ak-e-ᵃn-ikar-ta/ → ak-e-n-ikar-ta → ak-e-nkar-ta → akeŋkatta （開く-CAUS-NEG-VLZ-NPST）
c. /ko-ᵃn-ikar-ta/ → ko-n-ikar-ta → ko-nkar-ta → koŋkatta （来る-NEG-VLZ-NPST）
d. /se-ᵃn-ikar-ta/ → se-n-ikar-ta → se-nkar-ta → seŋkatta （する-NEG-VLZ-NPST）

5.5　存在動詞

存在動詞には有生物の存在を表す /or-/ と無生物の存在を表す /ar-/ の 2 種類がある。非存在を表す場合に /or-/ は否定接尾辞と共起し /or-^{a}n/ → oraN となる。これに対して /ar/ は否定接尾辞とは共起せず，非存在を表す場合には形容詞の /na-i/ → ne （無い-NPST）が用いられる。

5.6　繋辞動詞

繋辞動詞として /zjar-, jar-, ja-/ が確認できている。三者の使い分けについての詳細は不明であるが，音声的な変異の可能性もある。繋辞動詞は名詞と一部の形容詞に後続する。詳細な条件は不明であるが，接語として現れる場合もある。以下で例文の提示に際しては，1 段目に表層形，2 段目に基底形と形態素境界，3 段目に注釈，4 段目に日本語共通語訳をそれぞれ示す。

（57） a. soja　ohaN　{jaddo/　dʑaddo}
soj=^{w}a　ohan　{jar-^{r}u=do/　zjar-^{r}u=do}
それ=TOP　あなた　COP-NPST=SFP
それはあなたですよ。

（58） a. aɕtawa　jasuN　jado
asta=^{w}a　jasun　ja=do
明日=TOP　休み　COP.NPST=SFP
明日は休みだよ。

6.　形容詞形態論

本節では形容詞の形態論を記述する。

6.1　形容詞の内部構造

形容詞は（59）に示す内部構造を持つ。なお，日本語共通語のいわゆる形容動詞に相当する語類については現時点では網羅的な調査ができていない。

（59） 語根（-動詞語幹化接尾辞）-屈折接尾辞

6.2　屈折形態論

形容詞語幹に接続する屈折接尾辞の基底形を表 13 に示す。5.4.6 で示したように動詞否定接尾辞も形容詞語根と同じ振る舞いをする。

表 13　形容詞の屈折接尾辞

			肯定	否定
文終止・名詞修飾	直説法	非過去	-i, -ka	(-i na-i, -u na-i)
		過去	(-ikar-ta)	(-i na-ikar-ta, -u na-ikar-ta)
文終止	推量法		(-ikar-^{a}u)	
副詞節		条件形	(-ikar-^{r}eba, -ker-^{r}eba)	
		副詞形	-u	

直説法と推量法は文を終止できる。直説法は名詞修飾にも用いられる。条件形は副詞節を構成し，動詞や形容詞を修飾する。副詞形は動詞や形容詞を修飾する場合や，複数の形容詞を並置させる場合に用いられる。

形容詞の屈折接尾辞には直説法非過去 /-i, -ka/ と副詞形 /-u/ の 3 つがある。いずれも語根に直接接続する。非過去接尾辞のうち /-ka/ は /jo-/ 「良い」と /na-/ 「ない」でのみ観察されている。もう 1 つの非過去接尾辞である /-i/ は「良い」と「ない」を含む，調査で得られたすべての語根で観察されている。直説法過去，推量法，条件形に見られる /-ikar-, -ker-/ は動詞語幹化接尾辞であり，5.3 の表 12 に示した動詞の屈折接尾辞をとる。このうち /-ker-/ は条件形においてのみ観察される。条件形では両形式ともに同一話者の同一文脈での発話で使用されることを確認している。

非過去の否定には，形容詞「ない」の非過去 ne を用いる。過去の否定には，非過去形と形容詞「ない」の過去 nekatta を用いる。この際に，表 13 に示しているように非過去形ではなく副詞形 /-u/ が用いられることもある。両形式ともに同一話者の同一文脈での発話で使用されることを確認している。なお，現時点で得られている形容詞のうち「ない」には副詞形が確認できていない。

6.2.1　直説法非過去

非過去の /-i/ が形容詞語根の /taka-/ 「高い」に接続した例を（60）に示す。

（60）　非過去

/taka-i/　→　take　（高い-NPST）

6.2.2　副詞形

副詞形の /-u/ が形容詞語根の /taka-/ 「高い」に接続した例を（61）に示す。

（61） 副詞形

/taka-u/ → tako （高い-ADV）

6.3 派生形態論

6.2 の表 13 に示したように直説法過去，推量法，条件形では動詞語幹化接尾辞 /-ikar-, -ker-/ が現れる。これらは 5.3 の表 12 に示した動詞の屈折接尾辞をとる。

（62） 動詞語幹化接尾辞

a. /taka-ikar-ta/ → taka-ikatta → takekatta （高い-VLZ-PST）

b. /taka-ikar-^{a}u/ → taka-ikar-au → takekaro （高い-VLZ-INFR）

c. /taka-ikar-^{r}eba-/ → taka-ikar-eba → takekareba （高い-VLZ-COND）

d. /taka-ker-^{r}eba-/ → taka-ker-eba → takakereba （高い-VLZ-COND）

7. 助詞

本節では格助詞（7.1），取り立て助詞（7.2），接続助詞（7.3），終助詞（7.5）を記述する。

7.1 格助詞

観察された格助詞の一覧を表 14 に示す。表中の語例は基底形であり，括弧内には異形態として実現する形式も挙げる（以下でも同様）。

表 14 格助詞の一覧

主格	=ga
属格	=n_o (=no, =n), =ga
対格	=u_o (=o, =u), =oba
与格	=^{n}i (=ni, =i)
向格	=sae
奪格	=kaj
具格	=de
共格	=to
比格	=joʔken, =joʔka
限界格	=gij, =zuj

7.1.1 主格

主格の例を（63）に示す。

（63） 主格 /=ga/

taroːga	tsukueo	tateta
taroo=ga	tukue=u_o	tatak-ta
太郎=NOM	机=ACC	叩く-PST

太郎が机を叩いた。

7.1.2 属格

属格の例を（64）と（65）に示す。両者の使い分けの詳細は不明である。

（64） 属格 /=n_o/

tarogeɴ	ojaʑia	otoroɕido
taroo=gee=n_o	ojazi=^{w}a	otorosi-i=do
太郎=GEN.家=GEN	父親=TOP	怖い-NPST=SFP

太郎の父親は怖いよ。

（65） 属格 /=ga/

taroːga	ojga	tomodatsu	mitɕoddo
taroo=ga	oj=ga	tomodatj=u_o	mir-tjor-^{r}u=do
太郎=NOM	私=GEN	友達=ACC	見る-PROG-NPST=SFP

太郎が私の友達を見ているよ。

7.1.3 対格

対格の例を（66）と（67）に示す。両者の使い分けの詳細は不明である。

（66） 対格 /=u_o/

taroːga	ojga	tomodatsu	mitɕoddo	=（65）
taroo=ga	oj=ga	tomodatj=u_o	mir-tjor-^{r}u=do	
太郎=NOM	私=GEN	友達=ACC	見る-PROG-NPST=SFP	

太郎が私の友達を見ているよ。

（67） 対格 /=oba/

taroːga	ojba	mitɕoj
taroo=ga	oj=oba	mir-tjor-^{r}u
太郎=NOM	私=ACC	見る-PROG-NPST

太郎が私を見ている。

7.1.4 与格

与格の例を（68）に示す。

（68） 与格 /=ⁿi/

a. taroːwa ototni zennu okutta

taroo=ʷa ototj=ⁿi zen=uₒ okur-ta

太郎=TOP 弟=DAT お金=ACC 送る-PST

太郎は弟にお金を送った。

b. kodoma kannaj osoroɕi

kodom=ʷa kaɴnai=ⁿi osorosi-i

子ども=TOP 雷=DAT 怖い-NPST

子どもは雷が怖い。

7.1.5 向格

向格の例を（69）に示す。 /=ⁿi/ と交換可能な場合もあるが，両者の使い分けの詳細は不明である。

（69） 向格 /=sae/

taroːwa toːkjoːsae itado

taroo=ʷa tookjoo=sae ik-ta=do

太郎=TOP 東京=ALL 行く-PST=SFP

太郎は東京に行ったよ。

7.1.6 奪格

奪格の例を（70）に示す。

（70） 奪格 /=kaj/

hagukkaj tɕiga detta

ha+kukj=kaj ti=ga der-ta

歯+茎=ABL 血=NOM 出る-NPST

歯茎から血が出た。

7.1.7 具格

具格の例を（71）に示す。

（71） 具格 /=de/

taroːwa hotɕode jubu kitta

taroo=ʷa hotjo=de jubj=uₒ kir-ta

太郎=TOP 包丁=INST 指=ACC 切る-PST

太郎は包丁で指を切った。

7.1.8　共格

共格の例を（72）に示す。

（72）　共格 /=to/

taro:wa	ototto	asozjoj
taroo=ʷa	ototj=to	asob-tjor-ʳu
太郎=TOP	弟=COM	遊ぶ-PROG-NPST

太郎は弟と遊んでいる。

7.1.9　比格

比格の例を（73）と（74）に示す。両者の使い分けの詳細は不明である。

（73）　比格 /=joʔken/

taro:wa	otoʔjokkeN	sega	take
taroo=ʷa	ototj=joʔken	se=ga	taka-i
太郎=TOP	弟=CMP	背=NOM	高い-NPST

太郎は弟より背が高い。

（74）　比格 /=joʔka/

kjuwa	kinujokka	nuki
kju=ʷa	kinu=joʔka	nuku-i
今日=TOP	昨日=CMP	暑い-NPST

今日は昨日より暑い。

7.1.10　限界格

限界格の例を（75）と（76）に示す。両者の使い分けの詳細は不明である。

（75）　限界格 /=gij/

taro:wa	wagaegij	aruʔ	modotta
taroo=ʷa	wagae=gij	aruk-t	modor-ta
太郎=TOP	我が家=LIM	歩く-SEQ	戻る-PST

太郎は家まで歩いて戻った。

（76）　限界格 /=zuj/

kjonendzuja	taro:wa	se:to	jatta
kjonen=zuj=ʷa	taroo=ʷa	seeto	jar-ta

去年=LIM=TOP　太郎=TOP　生徒　COP-PST

去年までは太郎は生徒だった。

7.2　取り立て助詞

観察された取り立て助詞の一覧を表 15 に示す。表中の括弧内には異形態として実現する形式を挙げている。

表 15　取り立て助詞の一覧

主題	=ʷa (=wa, =a)
累加	=mo
例示	=den
限定	=baʔkaj, baʔkaj

7.2.1　主題

主題の例を（77）に示す。

（77）　主題 /=ʷa/

taro:wa　ototto　asoʑjoj　=（72）

taroo=ʷa　ototj=to　asob-tjor-ʳu

太郎=TOP　弟=COM　遊ぶ-PROG-NPST

太郎は弟と遊んでいる。

7.2.2　累加

累加の例を（78）に示す。

（78）　累加 /=mo/

kjonenna　jokakopmo　warikopmo　atta

kjonen=ʷa　jo-ka=kotj=mo　waru-i=kotj=mo　ar-ta

去年=TOP　良い-NPST=FN=ADD　悪い-NPST=FN=ADD　ある-PST

去年は良いことも悪いこともあった。

7.2.3　例示

例示の例を（79）に示す。

（79）　例示 /=den/

takea　dokodeN　aʔ

take=^{w}a　　doko=den　　ar-^{r}u

竹=TOP　　どこ=COM　　ある-NPST

竹はどこでもある。

7.2.4　限定

限定の例を（80）に示す。音韻論的に自立した語として現れる場合と，音韻論的に従属した接語として現れる場合がある。両者の使い分けの詳細は不明である。（80）では接語として現れている。

（80）　限定 /=baʔkaj/

hanakoN　　ɕukudajbakkaj　　mirande

hanako=n$_{o}$　　sjukudaj=baʔkaj　　mir-^{a}n-te

花子=GEN　　宿題=RST　　見る-NEG-SEQ

花子の宿題ばかり見ないで（，たまには太郎の宿題も見ろ）。

7.3　接続助詞

観察された接続助詞の一覧を表 16 に示す。

表 16　接続助詞の一覧

順接（理由）	=de
逆接	=baʔ, baʔteN
条件	=na

7.3.1　順接（理由）

順接（理由）の例を（79）に示す。

（81）　順接（理由）　/=de/

kjuwa　　mo:　　daretade

kju=^{w}a　　moo　　dare-ta=de

今日=TOP　　もう　　疲れる-PST-CSL

今日はもう疲れたから（，宿題は明日見るよ）。

7.3.2　逆接

逆接の例を（82）と（83）に示す。（82）では接語として（83）では語として現れている。両者の使い分けの詳細は不明である。

（82） 逆接 /=baʔ/

iɕiki	ɕite	kataraɴ	tɕabaʔ
isiki	si-te	katar-ᵃn-i	to=ja=baʔ
意識	する-SEQ	話す-NEG-NPST	NML=COP=ADVRS

意識して話しているわけではないけれど（, tɕa という形式を知らないうちに使っている）。

（83） 逆接 /baʔteɴ/

jonda=tɕa	batteɴ
job-ta=to=ja	baʔteɴ
呼ぶ=PST=NML=COP	ADVRS

呼んだんだけど（，来なかった）。

7.3.3 条件

条件の例を（84）に示す。

（84） 条件 /=na/

dottɕimo	oranna	naraɴ
doʔti=mo	or-ᵃn-i=na	nar-ᵃn-i
どちら=ADD	居る-NEG-NPST=COND	なる-NEG-NPST

（大きい人も小さい人も，）どちらもいなければならない。

7.4 引用助詞・準体助詞

引用助詞は /=ti/ である。例を（85）に示す。

（85） 引用 /=ti/

hanakotɕi	jonda
hanako=ti	job-ta
花子=QUOT	呼ぶ-PST

「花子」と呼んだ。

準体助詞は /=to, to/ である。例を（86）に示す。音韻論的に自立した語として現れる場合と，音韻論的に従属した接語として現れる場合がある。両者の使い分けの詳細は不明である。（86）では語として現れている。

（86） 準体 /=to/

jonda=tɕa	batteɴ	=（83）
job-ta=to=ja	baʔteɴ	

呼ぶ-PST=NML=COP　ADVRS

呼んだんだけど（，来なかった）。

7.5　終助詞

観察された終助詞の一覧を表 17 に示す。

表 17　終助詞の一覧

推量	=dodai (=dodaj, =dodee)
勧誘	=ga
伝聞	=gena
疑問	=ka, =ja
機能不明（目上）	=na
機能不明（非目上）	=ne, =do, =jo

7.5.1　推量

推量の例を（87）に示す。両者の使い分けについての詳細は不明であるが，音声的な変異の可能性もある。本稿では /=dodai/ と分析したが， /=do/ と /=dai/ に分けられる可能性もある。

（87）推量 /=dodai/

kokkaj	mireba	to:nzuj	mi:ga	naddodaj
koko=kaj	mir-ʳeba	toon=zuj	mir=ga	nar-ʳu=dodaj
ここ=ABL	見る-COND	遠く=LIM	見る=NOM	なる-NPST=INFR

ここから見れば遠くまで見られるだろう。

7.5.2　勧誘

勧誘の例を（88）に示す。

（88）勧誘 /=ga/

iddoki	noŋga
iddoki	nom-ʳu=ga
一緒に	飲む-NPST=HOR

一緒に飲もう。

7.5.3　伝聞

伝聞の例を（89）に示す。

（89） 伝聞 /=gena/

taroːwa	otokkaj	honnu	kot	kit	morotagena
taroo=^{w}a	ototj=kaj	hon=u$_{o}$	kow-t	ki-t	morow-ta=gena
太郎=TOP	弟=ABL	本=ACC	買う-SEQ	くる-SEQ	もらう-PST=HS

太郎は弟に本を買ってきてもらったそうだ。

7.5.4 疑問

疑問の例を（90）と（91）に示す。両者の使い分けについての詳細は不明である。

（90） 疑問 /=ka/

wajgeeN	ojaddonna	wazzee	otoroɕitoka
waj=gee=n$_{o}$	ojadj-don=^{w}a	waʔzee	otorosi-i=to=ka
君=GEN.家=GEN	父親-TTL=TOP	とても	恐ろしい-NPST=NML=Q

君のお父さんはすごく怖いの？

（91） 疑問 /=ja/

a.

ima	nanu	{nonʑjottoja/nonʑjottɕa}
ima	nan=u$_{o}$	nom-tjor-^{r}u=to=ja
今	何=ACC	飲む-PROG-NPST=NML=Q

今何を飲んでいるの？

b.

ima	nanu	{nonʑjojja/*nonʑjoʔja}
ima	nan=u$_{o}$	nom-tjor-^{r}u=ja
今	何=ACC	飲む-PROG-NPST=Q

同上。

7.5.5 /=na, =ne, =do, =jo/

機能不明の終助詞のうち， /=na/ は目上に対してのみ使用され， /=ne, =do, =jo/ は同等と目下に対してのみ使用される。/=na, =ne/ の例を（92）に， /=do/ の例を（93）に， /=jo/ の例を（94）にそれぞれ示す。 /=ne, =do, =jo/ の使い分けについての詳細は不明である。グロスは便宜上 SFP とする。

（92） 終助詞 /=na, =ne/

kjuwa	{nukina/	nukine}
kju=^{w}a	{nuku-i=na/	nuku-i=ne}
今日=TOP	{暑い-NPST=SFP.POL/	暑い-NPST=SFP}

今日は｛暑いですね／暑いね｝

（93） 終助詞 /=do/

taro:wa	to:kjo:sae	itado	=（69）
taroo=^{w}a	tookjoo=sae	ik-ta=do	
太郎=TOP	東京=ALL	行く-PST=SFP	

太郎は東京に行ったよ。

（94） 終助詞 /=jo/

wajgeeN	ojaddonna	me:baN	ɕotsuo	nonkajo
waj=gee=n	ojadj-don=^{w}a	meebaN	sjotu=u$_{o}$	nom=ka=jo
君= GEN.家=GEN	父親-TTL=TOP	毎晩	焼酎=ACC	飲む=Q=SFP

君のお父さんは毎晩焼酎を飲むの？

8. 指示語と疑問語

本節では指示語（8.1）と疑問語（8.2）を記述する。両者とも名詞や副詞など複数の品詞にまたがって実現する。

8.1 指示語

指示語の一覧を表 18 に示す。

表 18 指示語の一覧

	近称	中称	遠称
代名詞	koj	soj	aj
場所名詞	koko	soko	açko
連体詞	koN	soN	aN
様態連体詞	kogena, kogenaN	sogena, sogenaN	agena, agenaN
様態副詞	kogeN	sogeN	ageN

近称・中称・遠称はそれぞれ大まかに，近称は指示対象が話し手に近い場合，中称は指示対象が聞き手に近い場合，遠称は指示対象が話し手からも聞き手からも遠い場合に使用されるが，使い分けの詳細は不明である。

8.1.1 指示代名詞

指示代名詞の例を（95）に示す。

（95） 指示代名詞

aja	tsuʔ	ja:na

aj=^{w}a　　tukj　　ja=na

あれ=TOP　　月　　COP=SFP.POL

あれは月ですよ。

8.1.2　指示場所名詞

指示場所名詞の例を（96）に示す。

（96）　指示場所名詞

sokode　　magiddo

soko=de　　magir-^{r}u=do

そこ=INST　　曲がる-NPST=SFP

そこで曲がるぞ。

8.1.3　指示連体詞

指示連体詞の例を（97）に示す。

（97）　指示連体詞

soN　　çitowa　　dajja

soN　　hito=^{w}a　　daj=ja

その　　人=TOP　　誰=Q

その人は誰？

8.1.4　指示様態連体詞

指示様態連体詞の例を（98）に示す。/kogena, kogenaN/ のようなペアの使い分けの詳細については不明であるが，相互に交換可能である可能性もある。

（98）　指示様態連体詞

kogenaN　　çiwa　　okjassa:wa　　kondo

kogenaN　　hi=^{w}a　　o-kjakj-saa=^{w}a　　ko-^{a}n=do

こんな　　日=TOP　　POL-客-TTL=TOP　　来る-NEG=SFP

こんな日はお客さんは来ないよ。

8.1.5　指示様態副詞

指示様態副詞の例を（99）に示す。

（99）　指示様態副詞

kogeN　　seNja

kogeN　　se-^{a}n=ja

このように　する-NEG=Q

このようにしなさい。

8.2　疑問語

疑問語の一覧を表 19 に示す。

表 19　疑問語の一覧

代名詞（人）	daj
代名詞（複数の人）	daj-dom
代名詞（動物・もの）	naj
場所名詞	doko
数名詞（値段）	doçko
数名詞（数一般）	doçko, naNbo
時間名詞	iʔ
選択名詞	doʔti
連体詞	doN
様態連体詞	dogena, dogenaN
様態副詞	dogeN, ikeN
理由副詞	najgoti

8.2.1　疑問代名詞

疑問代名詞の例を（100）-（102）に示す。

（100）　疑問代名詞（人）

soN　　çitowa　　dajja　　=（97）

soN　　hito=^{w}a　　daj=ja

その　　人=TOP　　誰=Q

その人は誰？

（101）　疑問代名詞（複数の人）

dajdoŋga　　ottoka

daj-dom=ga　　or-^{r}u=to=ka

誰-PL=NOM　　いる-NPST=NML=Q

誰（複数）がいるの？

（102）　疑問代名詞（動物・もの）

koja　　{naɴja/　najja}

koj=^{w}a　　nan=ja

これ=TOP　　何=Q

これは何？

8.2.2　疑問場所名詞

疑問場所名詞の例を（103）に示す。

（103）　疑問場所名詞

doki　　ikeba　　jokato

doko=^{n}i　　ik-^{r}eba　　jo-ka=to

どこ=DAT　　行く-COND　　良い-NPST=NML

どこに行けばいいの？

8.2.3　疑問数名詞

疑問数名詞の例を（104）と（105）に示す。値段と数一般のどちらも同じ形式で表せる。数一般には /naɴbo/ という形式も使用される。

（104）　疑問数名詞（値段）

soɴ　　kajmowa　　doçko　　sutto

soɴ　　kajmo=^{w}a　　doçko　　su-^{r}u=to

その　　サツマイモ=TOP　　いくら　　する-NPST=NML

そのサツマイモはいくらするの？

（105）　疑問数名詞（数一般）

ançitowa　　kajmoo　　doçko　　kuretato

aɴ=hito=^{w}a　　kajmo=u$_{o}$　　doçko　　kure-ta=to

あの=人=TOP　　サツマイモ=ACC　　いくつ　　くれる-PST=NML

あの人はサツマイモをいくつくれたの？

8.2.4　疑問時間名詞

疑問時間名詞の例を（106）に示す。

（106）　疑問時間名詞

iʔ　　oga　　natto

iʔ　　aw=ga　　nar-^{r}u=to

いつ　　会う=NOM　　なる-NPST=NML
いつ会えるの？

8.2.5　疑問選択名詞

疑問選択名詞の例を（106）に示す。

（107）　疑問選択名詞

dottɕimo	oranna	naraN	=（84）
doʔti=mo	or-^{a}n-i=na	nar-^{a}n-i	
どちら=ADD	居る-NEG-NPST=COND	なる-NEG-NPST	

（大きい人も小さい人も，）どちらもいなければならない。

8.2.6　疑問連体詞

疑問連体詞の例を（108）に示す。

（108）　疑問連体詞

koN	nakade	doN	okaçga	hoɕija
koN	naka=de	doN	o-kasj=ga	hosi-i=ja
この	中=INST	どの	POL-菓子=NOM	欲しい-NPST=Q

この中でどのお菓子が欲しい？

8.2.7　疑問様態連体詞

疑問様態連体詞の例を（109）に示す。/dogena, dogenaN/ の使い分けの詳細については不明であるが，相互に交換可能である可能性もある。

（109）　疑問様態連体詞

omaja	dogenaN	okasu	tsukurogoʔ	attoja
omaj=^{w}a	dogenaN	o-kasj=u$_{o}$	tukur-^{a}u=gotj	ar-^{r}u=to=ja
君=TOP	どんな	POL-菓子=ACC	作る-VOL=FN	ある-NPST=NML=Q

君はどんなお菓子が作りたい？

8.2.8　疑問様態副詞

疑問様態副詞の例を（110）に示す。/dogeN, ikeN/ の使い分けの詳細については不明であるが，相互に交換可能である可能性もある。

（110）　疑問様態副詞

soN	ʑiwa	dogeN	jonto
soN	zi=^{w}a	dogeN	jom-^{r}u=to
その	字=TOP	どのように	読む-NPST=NML

その字はどのように読むの？

8.2.9 疑問理由副詞

疑問理由副詞の例を（111）に示す。

（111） 疑問理由副詞

najgotɕi	soki	tat	ottɕa
najgoti	soko=^{n}i	tat-t	or-^{r}u=to=ja
なぜ	そこ=DAT	立つ-SEQ	居る-NPST=NML=Q

なぜそこに立っているの？

9. 統語論

本節では統語論を記述する。基本語順（9.1），格配列（9.2），文タイプ（9.3），ヴォイス（9.4），可能（9.5）の順で扱う。

9.1 基本語順

基本語順を記述する。

9.1.1 1 項文

1 項文の例を（112）に示す[12]。主語の後に述語が現れる語順が基本である。述語が非能格動詞，非対格動詞，形容詞，名詞のどれであっても同様である。

（112）

tarogeN	ojaʑia	otoroɕido	=（64）
taroo=gee=n$_{o}$	ojazi=^{w}a	otorosi-i=do	
太郎=GEN.家=GEN	父親=TOP	怖い-NPST=SFP	

太郎の父親は怖いよ。

9.1.2 2 項文

2 項文の例を（113）に示す。主語と述語の間に直接目的語が現れる。

[12] 基底の長母音（同一母音の連続）は表層で短母音として実現することがある。自由変異と考えられるが，詳しい調査は実施できていない。

（113） taro:ga tsukueo tateta
taroo=ga tukue=u_o tatak-ta
太郎=NOM 机=ACC 叩く-PST
太郎が机を叩いた。

9.1.3 3 項文

3 項文の例を（114）に示す。主語と直接目的語の間に間接目的語が現れ，述語が最後に現れる。

（114） taro:wa ojakaj zennu morota
taroo=^{w}a oja=kaj zen=u_o morow-ta
太郎=TOP 親=ABL お金=ACC もらう-PST
太郎は親からお金をもらった。

9.2 格配列

格配列を記述する。対格型の格配列が見られ，主格・対格ともに無助詞の例がほとんど見られない有標主格対格体系を持つ。

9.2.1 1 項文

1 項文の主語は =ga で標示される。無助詞の例は見られない。

（115） hagukkaj tɕiga detta =（70）
ha+kukj=kaj ti=ga der-ta
歯+茎=ABL 血=NOM 出る-NPST
歯茎から血が出た。

9.2.2 2 項文

2 項文の主語は =ga で標示される。直接目的語は =u_o または =oba で標示されるが，使い分けの詳細は不明である。現時点で =oba は人称代名詞と共起する例が大多数であるのに対して，=u_o にはそのような偏りは見られない。=oba の異形態として =ba も現れることがある。

（116） taro:ga tsukueo tateta =（113）
taroo=ga tukue=u_o tatak-ta
太郎=NOM 机=ACC 叩く-PST
太郎が机を叩いた。

9.2.3　3 項文

3 項文の間接目的語は =ni や =kaj で標示される。主語と直接目的語の標示は 2 項文の場合と同様である。ただし（117）では主語の主格標示はなされていない。

（117）　a.

taro:wa	ototni	zennu	okutta	=（68）
taroo=^{w}a	ototj=ni	zen=u$_{o}$	okur-ta	
太郎=TOP	弟=DAT	お金=ACC	送る-PST	

太郎は弟にお金を送った。

b.

taro:wa	ojakaj	zennu	morota
taroo=^{w}a	oja=kaj	zen=u$_{o}$	morow-ta
太郎=TOP	親=ABL	お金=ACC	もらう-PST

太郎は親からお金をもらった。

9.3　文タイプ

動詞文の文タイプとして平叙・疑問・命令が挙げられる。それぞれの例文を示す。

（118）　平叙文

tarogeɴ	ojaʑia	me:baɴ	ɕotsuo	kurodo
taroo=gee=n$_{o}$	ojazi=^{w}a	meebaɴ	sjotu=u$_{o}$	kurow-^{r}u=do
太郎= GEN.家=GEN	父親=TOP	毎晩	焼酎=ACC	飲む-NPST=SFP

太郎の父親は毎晩焼酎を飲むよ。

（119）　肯否疑問文

wajgeeɴ	ojaddonna	me:baɴ	ɕotsuo	nonkajo	=（92）
waj=gee=n	ojadj-don=^{w}a	meebaɴ	sjotu=u$_{o}$	nom=ka=jo	
君= GEN.家=GEN	父親-TTL=TOP	毎晩	焼酎=ACC	飲む=Q=SFP	

君のお父さんは毎晩焼酎を飲むの？

（120）　疑問詞疑問文

dajdoŋga	ottoka	=（101）
daj-dom=ga	or-^{r}u=to=ka	
誰-PL=NOM	いる-NPST=NML=Q	

誰（複数）がいるの？

（121）　肯定命令文

hajo	{haɕiraŋka/	haɕire}
haja-u	{hasir-^{a}n=ka/	hasir-^{a}i}
早い-ADV	{走る-NEG=Q/	走る-IMP}

早く{走らないか/走れ}。

（122）　否定命令文

sote	denna
soto=^{n}i	der-^{t}na
外=DAT	出る-PROH

外に出るな。

9.4　ヴォイス

動詞の結合価を変える手段として使役と受動を挙げる。それぞれの例文を示す。

（123）　使役

taro:wa	ototsu	asobaseʔ	oj
taroo=^{w}a	ototj=u$_{o}$	asob-^{s}ase-t	or-^{r}u
太郎=TOP	弟=ACC	遊ぶ-CAUS-SEQ	いる-NPST

太郎は弟を遊ばせている。

（124）　受動

taro:wa	hanakokaj	aɕu	ɸuntakurareta
taroo=^{w}a	hanako=kaj	asj=u$_{o}$	huntakur-^{r}are-ta
太郎=TOP	花子=ABL	足=ACC	踏む-PASS-PST

太郎は花子に足を踏まれた。

9.5　可能

可能の意味を表すには動詞語根に主格接語 =ga を付け，nar-「できる」を続ける。否定可能（不可能）は nar- に否定接辞を付けることで表す。それぞれの例文を示す。

（125）　肯定可能

oja	hajo	haɕi:ga	naddo
oj=^{w}a	haja-u	hasir=ga	nar-ru=do
私=TOP	早い-ADV	走る=NOM	できる-NPST=SFP

私は早く走れるよ。

（126）　否定可能（不可能）

oja	hajo	haɕi:ga	narando
oj=^{w}a	haja-u	hasir=ga	nar-^{a}n-i=do
私=TOP	早い-ADV	走る=NOM	できる-NEG-NPST=SFP

私は早く走れないよ。

略号一覧

ABL: 奪格　ACC: 対格　ADD: 累加　ADV: 副詞化　ADVRS: 逆接　ALL: 向格　CAUS: 使役　CMP: 比格　COM: 共格　COND: 条件　COP: コピュラ　CSL: 理由　DAT: 与格　FN: 形式名詞　GEN: 属格　HON: 尊敬　HOR: 勧誘　HS: 伝聞　IMP: 命令　INFR: 推量　INST: 具格　LIM: 限界格　NEG: 否定　NLZ: 名詞化　NML: 準体　NOM: 主格　NPST: 非過去　PASS: 受動　PFX: 接頭辞　PL: 複数　POL: 丁寧　PROG: 継続　PROH: 禁止　PST: 過去　PUR: 目的　Q: 疑問　QUOT: 引用　RST: 限定　SEQ: 継起　SFP: 終助詞　SG: 単数　TOP: 主題　TTL: 敬称　VLZ: 動詞語幹化　VOL: 意志

/ / 音素表記　[ ] 音声表記　. 音節境界　- 接辞境界　= 接語境界　+ 複合語幹境界

参照文献

占部由子（2018）「南琉球八重山語西表島船浮方言の文法概説」修士論文，九州大学.

木部暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』東京：勉誠出版.

肝付町「住民基本台帳人口」https://kimotsuki-town.jp/chosei/tokei/2098.html［令和 3 年 11 月アクセス］.

清瀬義三郎則府（1971）「連結子音と連結母音と：日本語動詞無活用論」『国語学』86: 56–42.

黒木邦彦（2015）「音韻規則」森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）（2015），30–49.

下地理則（2018）『南琉球宮古語伊良部島方言』，シリーズ記述文法 1．東京：くろしお出版.

髙城隆一（2020）「鹿児島県大隅半島内之浦方言における二型アクセントの痕跡」『東京大学言語学論集』42: 267–282.

中村京介（2019）「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」修士論文，東京外国語大学.

松岡葵（2021）「福岡県柳川市方言の文法概説」修士論文，九州大学.

森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）窪薗晴夫（監修）（2015）『甑島里方言記述文法書 改訂版』，大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」．東京：国立国語研究所.